

沈黙

映画文学人生論

原作：遠藤周作 (1971年)
監督：篠田正浩 (1971年) 脚本：遠藤周作 篠田正浩
出演：ロドリゴ D.ランプソン 撮影：宮川一夫
キチジロー マコ岩松 音楽：武満徹
ガルペ ダン・ケニー 井上筑後 岡田英次
フェレイラ 丹波哲郎 菊 岩下志麻

踏むがよい お前のその足の痛みを、私が
いちばんよく知っている

遠藤周作『沈黙』は一昔前、読んだことがあるが、神の沈黙という意味が私には理解できなかった。高天原の神ではないし、仏でもない。キリスト教の神の沈黙だ。これがわからなければ遠藤周作の文学も西洋の文学も理解できない。

気を取り直し、今度こそと再読に挑戦した。映画は篠田正浩監督作品のDVDは品薄、マーティン・スコセッシ監督作品は未完成で。今のところまだ鑑賞する機会に恵まれていない。ただし、遠藤周作と篠田正浩による脚本は読んだ。

主人公はロドリゴ（D・ランプソン）というポルトガル人神父。島原の乱（一六三七、八年）で三万五千人の切支丹が一人残らず虐殺されて、ポルトガルとの通商、交易は断絶し、司祭（パードレ）と修道士（イルマン）はすべて日本から追放されたが、信仰の火を絶やさぬため、ロドリゴはガルペとともに敢然と密入国することにした。

マカオで知り合った日本人のキチジロー（マコ岩松）に案内されたが、キチジローはキリストを裏切るユダのような男だった。ガルペは殉教の死をとげたが、ロドリゴは逮捕され、踏絵で、「転べ」と言われた。「転ぶ」というのはキリスト教への信仰を棄てるという意味である。

信者たちがデウス（神）を信仰しているという理由で殺されている国にやってきたロドリゴは、



沈黙

映画文学人生論

神の沈黙に耐えられなくなり、ついに、転んだ。座敷牢で下帯一つになり、欲情に燃えた目で、菊（岩下志麻）を見た。菊は動かない。手がのび、女の帯にかかる。されるがまま、横になる。おそいかかるロドリゴ。無表情な菊の顔。狂ったように、剥いでゆくロドリゴ。重なる二人。

この日から、セバスチアン・ロドリゴは、岡田三右衛門と名のることになった——というのが脚本の結末である。原作では妻の名は菊とはなっていないが、伴天連岡田三右衛門が延宝九年（一六八一年）、六拾四歳で病死したという「切支丹役人日記」の記録は引用されている。

ロドリゴはなぜ転んだのだろう。もし司祭が転べば、拷問を受けている信徒たちの命を助けてもらえると思っただのか。「踏むがよい。お前のその足の痛みを私がいちばんよく知っている」と銅板のあの人に言われたような気がしたためか。「二十年、私はこの国に布教したのだ。・・・この国の者たちが信じたものは我々の神ではなく、彼等の神々だ」と師のフェレイラ（丹波哲郎）にさとされたためか。それともお菊の色香に迷っただけなのか。

神の沈黙よりも、「日本人は人間を超えた存在を考える力を持っていない」というフェレイラの指摘のほうが日本人の私には気になる。

異教徒の神の沈黙蟬時雨